

新聞記者とことば

栗田 巨



「言葉は身勝手で、感情的で、残酷で、ときに無力だ。それでも私たちは、言葉のチカラを信じている」

私の古巣、朝日新聞がこんなCMを流している。

湾岸戦争の光景。9・11の無惨。パレスチナ自治区の紛争にまきこまれて逃げまどう少女。そうした映像が流れ、「ジャーナリスト宣言 朝日新聞」と結ぶ。

コラムニストの天野祐吉さんが「新聞社のCMというところ、いままでは販売拡張用のものが多かったが、こういうのが出てくるのはとてもいい。各紙がそれぞれの特長や主張をはっきり打ち出してくれたら、景品なんかにつられずに、自分の気に入った新聞を選べる」と紙上（連載「CM天気図」）で褒め、朝日も満足げに社内報で再録した。

むろん、ウィットとアイロニー豊かな天野さんのことだ。褒めつばなしでは終わらない。

「ま、どっちを向いてもひどい時代である。それだけに、朝日新聞にはがんばってほしいと思う。でも、

あんまり肩にチカラが入りすぎて、エンピツが折れないようにね」

と最後に軽くいなしている。社内報は、この部分は再録していない。ま、カワイイとおうか。

古巣では不祥事が続いた。懸命の巻き返しである。私も新聞川柳の選者としてなお紙面づくりに関係しているし、力いっぱい応援したい。

したいが、このCMにはどうも違和感がある。ことばは「身勝手に、感情的で、残酷で、ときに無力」なのだろうか。かりにそうであるとしたら「私たちは、言葉のチカラを信じ」られるのだろうか。

同期生（全員がすでに朝日を離れている）の一人は「空気が読めないのは相変わらずだなあ。テレビでもラジオでも、あのCMが流れると、面を伏せて穴にもぐります」とメールを寄越した。

焼酎のグラスを手にしてパソコンに向かっていた私は、すぐ返信した。「言葉は無力！ですか。なら廃業

せよ」

酔っていたせいで過激になったけれど、本心だ。こ
とばが「身勝手で、感情的で、残酷」とは、私は思わ
ない。「ときに無力」であるのかも知れないが、それ
を認めてはいけない。「ことばは力」なのだ。そうで
なければ、ことばに関わる仕事を続けることはできない。

などと当方も力んでしまったけれど、それはさておく。
四十年前に新聞記者になった当時、同業の人たちは
書くことが好き、ことばを自在に操る種族であって、
それが証拠に入社試験でも作文力（いまは論文力）を
重視するではないか、と私は思い込んでいた。

それでもあるが、そうでもない。経験を積むにつれ、
考えは微妙に変わった。

ことばを自在に操る記者は、もちろん何人も存在す
る。メールを寄越した同期生もその一人だった。いま
もフリーライターとしての彼のルポ、エッセイを雑誌
などでしばしば目にし、そのたびに私は「かなわない
なあ」と唸る。

伸び伸びした筆致、的確な語彙の選択、明快な論理
と説得力。特にことばの選び方に感嘆した。自分には、
このことばは思いつけない。頭に浮かばない。なのに
彼は、軽々と操ってみせるのだ。つまるところ神さま
がそうした才能をくださったかどうかである。そう思
うしかない。

といて、あきらめてばかりもいられない。オのな
いはせいぜい努力するしかない。

量はついに質に転じる、と教訓を垂れた先輩がい

た。要は、たくさん書け、書けばそれなりに上達する、
ということ。畳の上の水練と同じで、文章読本のたぐ
いをいくら読んでもことばの操り上手にはなれない。
で、私も書いた。ときどきは、すごく書いた。その
結果、ほんの少しはうまくなったと思う。

いい先生にも恵まれた。

朝日は新人を一年生、二年生と呼ぶ習わしだった。
新聞社ということば商売の会社は、学校みたいな一面
をもっていて、原稿を出すと先輩（キャップ）や上司
（デスク）が寄つてたかつてあーだ、こーだと直す。
直し方がうまければ、学ぶことも多くなる。ほんの
ちよつと何文字か言い換えただけで、びっくりするほ
ど原稿のグレードが高くなることもある。お米を上手
に炊くと米粒がくつきり立つけれど、あんな印象だ。

指折ると一人、二人、ウン三人かしら、私にはい
い先生がいた。「○○の可能性がある」と私が書いた。
先生は「○○の恐れがある」と直した。「可能性」と
いうカタイことばから、「恐れ」という具体的な指摘へ。
これだけのことで、グレードは上がるのだ。給料をも
らって、ことばの磨き方を習っているようなものだっ
た。幸せだった。

幸せだったと過去形にしたのは、ああした徒弟教育
的な環境はいまでは微かにしか存在しないと思うから
だ。むろんコンピュータが全面に躍り出てきたため
ある。

鉛筆で紙に書く。考え考え書く。それが原稿という
ものだった。先生はそれを青鉛筆で直す。どこをどう

直したかは、原稿を読み返せば一目瞭然だった（ついでながら朝日社会面に「青鉛筆」という小欄があるが、由来はこの青鉛筆にある。読者には、何のことかわかるまい。新聞のひとりよがりの象徴例だ）。

一目瞭然に話を戻すと、いまはパソコンで原稿を書く。パタパタとキーを叩くと、画面にことばが出てくる。昔は書いた文字で粗雑な原稿か否かがある程度わかった。昨今は無機質なフォントが並ぶだけ。

論説委員だったころ、規定の二倍も長い社説原稿を書いた同僚がいた。パタパタ叩いていたら、何となくそうなってしまったのだという。鉛筆ではあり得ない。引き締まった原稿は次第に姿を消し、行数ばかり多い水増し原稿が、必然的に増える。

さて、原稿をデスクに出す。昔は手渡しした。いまは親コンピュータに出稿する。デスクは親コンピュータから原稿を引き出し、自分のコンピュータで修正して最終出稿する。どこをどう直されたのか、筆者にはよくわからないままに。だから学ぶ機会も減りがちに

なる。
自分の手で、意識をもって、材料を吟味し、落ち着いて文章を書く。でない、ヒトサマに読んでいただけの文章にはならない。書いた文章は、できればひと晩寝かせ、推敲を重ねて仕上げる。

そのことが大切だと、不肖私にも近ごろようやくわかってきた。

ところが新聞記者の仕事とは、スピードとか繁忙とか締め切り時間とか、文章の練度を阻害することから

ばかり。カレライスのようにひと晩寝かせれば熟すなんてことは、夢のまた夢。よほど自覚して鍛錬に励まなければ、入社したときよりもかえって文章がヘタクソになる仕掛けになっているのだ。

けれども、しかしそれでも、私は新聞の「ことばの力」を信じる。

取材力、洞察力に優れ、ことばをプロとして操れる記者が一人でもいれば、新聞は十分に存在の意義、価値がある。そしてもちろん、そうした記者が一人しかいないなんてことは、私の知る限りあり得ない。

話は最初のCMに帰る。

「言葉は身勝手で、感情的で、残酷で、ときに無力だ。それでも私たちは、言葉のチカラを信じている」

この「言葉」を、「人間」に置き換えてみたい。「人間は身勝手で……それでも私たちは、人間の力を信じている」と。

ならば私も納得する。「ことばの力」とは、たとえば、こういうことではないだろうか。

栗田 巨（くりたわたる） コラムニスト。一九四〇年、東京生まれ。六五年、朝日新聞社に入り社会部記者、論説委員（社会一般・教育担当）などを経て九五年から六年近く朝日コラム「天声人語」担当、約二千本を執筆。現在、日本エッセイスト・クラブ理事、日本ナショナルトラス理事、朝刊掲載の「朝日川柳」選者（選者名・西木空人）。著書に『おとなのための漢文51』（河出書房新社）、『漢文を学ぶ（一）』（四）』（ポケット川柳）（童話屋）、『書き上手』（五月書房）ほか。